



Title	モダニスト芥川龍之介の研究 : 中国物・開化物・自己表象を中心として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高, 啓豪
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13246号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71500
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kao_Chihao_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 高 啓 豪

学位論文題名

モダニスト芥川龍之介の研究

——中国物・開化物・自己表象を中心として——

・本論文の観点と方法

本論文は、作家・芥川龍之介と大正市民社会におけるモダニズム（近代主義、現代的文芸様式）との関わりを再検討することを中心的な課題とし、芥川のモダニストとしての資質をその作品の分析を通して明確にすることを主な目的とする。具体的には、まず従来の研究において定式化されてきたモダニズムの多義性を改めて検討し、芥川自身が代表的なモダニズム文芸である新感覚派に対して示した肯定的な見方をも勘案することにより、芥川の文芸様式におけるモダニズム的な要素の重要性を明らかにする。また芥川の作品に対するモダニズム論的観点からの研究状況を検証し、個々の作品におけるモダニズム的な要素を都市空間、身体感覚、ジェンダー、オリエンタリズム、意識と無意識などの面から追究し、作品に現れた自己と他者、主体と客体との対比にも着目して、芥川におけるモダニズムの本質を究明することを主眼とする。

日本のモダニズムは、広義においては明治維新以来の合理主義的精神に支えられた近代主義を基盤とし、狭義においては一九二〇年代前後に展開した近代批判の視点を有する前衛芸術運動を意味する。またモダニズムは、思想・文化のみならず社会的な現象をも巻き込んで展開したことから、本論文の方法としては、多岐にわたる日本のモダニズム文芸様式とともに、いわゆるモダンな生活様式の表現をも芥川の作品に認め、それに即した手法によって分析することとした。具体的には、第一部において大正期のいわゆる「支那趣味」を背景とした中国物、第二部において大正期から見て近過去にあたる明治を題材とした開化物、第三部においては同時代及び芥川自身の周囲に基盤を置いた自己表象の小説に焦点を絞る。第一部と第二部では、主として広義のモダニズムを念頭に作品分析を行い、第三部では主に一九二〇年代モダニズム文芸との関わりにおいて、自己言及や無意識の要素を積極的に取り入れた前衛文芸として芥川晩年の作品を検討する。

歴史物から現代物にわたる幅広い作品を創作した芥川の芸術的姿勢には、一貫したモダニストの立場が認められる。本論文はそのような着眼に基づき、芥川龍之介をモダニストとして再考するものである。

・本論文の内容

上記の構想を述べた序論に続き、本論は三部構成を採る。第一部では、芥川の中国物の分析を通して、そこから日本のモダニティとの繋がりについて論じた。第一章では「杜子春」を中国唐代の原典との相違点を明らかにし、結末に新しい生活様式としての「郊外」の概念を垣間見させ、大正時代の市民的欲望が投影された、モダンの要素が認められる作品として再評価を行った。第二章では「南京の基督」を谷崎潤一郎の「秦淮の夜」を継承し、中国人女性をエキゾチックなものとして

傍観する日本人を描いた「支那趣味」のオリエンタリズムを帯びた小説と見なす。民族・宗教・異文化交流などの入り組んだ問題を抱えた、当時の地政学を反映する豊穡なメタファーを内包した作品として論じた。第三章では「首が落ちた話」と「馬の脚」を取り上げている。両作品は共に中国の怪奇小説を粉本にしながら、二十世紀初頭における日本の中国進出を表象し、異常な事件を経て生ずる身体感覚の変容を取り入れた点において共通点を持っている。さらに、一九二〇年代前後の意識の流れ、自由連想、コラージュなどアヴァンギャルド芸術の手法が駆使され、エキゾチックな怪異性を帯びた身体表象を分析し、一種のマジック・リアリズムとしても読みうる可能性を示した。

続く第二部では、市民社会が円熟期を迎えた時期としての大正時代から照射された明治の開化物を対象として、芥川作品におけるモダニティの新たな局面を探究する。第四章では「お富の貞操」を取り上げ、身体及びセクシュアリティの方面からのアプローチを通して、近代化の中における貞操観念がいかに国民国家建設の位相に取り込まれたかを考察し、併せてストリンドベリの「令嬢ジュリー」の受容にも触れ、男性の上昇志向の属性を作中人物の中に認める。第五章で対象とする「開化の殺人」と「開化の良人」においては、明治時代の男女の恋愛結婚の様相が遺書、日記、回想など多種多様な語りの手法によって語られる。これらは共通に「女権論者」や「新しき女」を登場させ、明治時代の自由恋愛により生じる不自由というパラドックスを宿している。そこには明治へのノスタルジーのみならず、恋愛を通して、日本の西洋化・近代化のあるべき姿について、単純に調和的なロマンティシズムに収斂しない形で描き出した芥川の様式意識が認められる。第六章では「舞踏会」を取り上げ、西洋文明の「模倣」をめぐる、ピエール・ロティ「江戸の舞踏会」の文明批判との関わりから論じた。西洋のモダンライフを文化的遺伝子（ミーム）の観点から見ると、大正モダンという東洋と西洋の混血児の誕生が、その不器用さも含めて、一種の美学として芥川にとらえられたものと認めている。第七章では「雛」を、開化で敗北した一家を描く作品としてとらえ、西洋人による日本の伝統への無理解、西洋文化一辺倒の文明開化の暴力性を示唆し、グローバル化しつつあった世界における伝統文明存続の危機感へと接続する作品として理解する。

さらに第三部では、晩年に至りアヴァンギャルド芸術に親近する傾向を見せた芥川の創作態度の変化を検証する。第八章では「疑惑」を対象として、複数の伏線が回収されず、語りが疑惑を幾重にも重ねていく構造を中心に論じた。震災という極限状態を描いてモラルと理性を検証し、人間の行為に意味を付与することの限界を示しつつも、無意識という「怪物」を探究することで一九二〇年代のモダニズム文芸の一翼を担った作品として認めた。第九章では「保吉の手帳から」を取り上げ、芥川自身の体験を創作の題材に取り入れた保吉物の出現を、芥川文芸において重要な区切りとしてとらえる。保吉物におけるメタフィクション性と、書き手の意識と感覚そのものに密着し、意識と無意識が錯綜し、物語の筋が副次的なものとなるモダニズムの感覚を示したテキストとして、「蜃気楼」や「歯車」にその系譜が受け継がれるものとした。第十章では「蜃気楼」を取り上げ、浜辺に漂着した物の無作為の描写を無意識のメタファーと見なし、プルーストの『失われた時を求めて』にも似た感覚と記憶の連動する小説作法を見出した。芥川は「蜃気楼」以降の晩年において、鋭敏な身体感覚と無意識の表現を駆使し、心象風景を構築する作品へと傾斜する。第十一章では「歯車」を論じ、語られている物象が他の物象との連動で意味を付与され、互いに動かし合う現象が「歯車」の表現を構築していることを論証した。モダニスト芥川龍之介が最後に到達したアヴァンギャルド小説として「歯車」を再評価した。

結論では伝統からの脱却による広義のモダニズムと、アヴァンギャルド芸術に代表される狭義のモダニズムの両視点を巧みに融合した芥川のモダニズムを再確認し、古典に基盤を置き歴史を見据える「大きな物語」と、個々の生の表象に象嵌された「小さな物語」との両様に芥川の問題意識を改めてとらえ直した。特に晩年の感覚的な作品が西洋のアヴァンギャルド文芸と共時性を有することをと認め、従来見落とされがちだった芥川のモダニストとしての要素が再発見されたとする。